

特別寄稿 早すぎた先駆者“真塩紋弥”

松山容子（女優）

もう十何年にもなりますか、烈しい夕立に降られた夫、棚下が、町田市の萩原ビルの三階に雨宿りにとび込んだのが、萩原先生御夫妻とのおつき合いの始まりでした。

普通、雨宿りといえば、軒先をお借りするか、またお店であれば、ちよつとした買物でもしながら、雨の止むのを待つものでしょうが、何故、わざわざビルの奥のエレベーターで三階まで上つて、一面識もない萩原整骨院で雨宿りさせて頂いたのか、一度訊いてみたいと思いますながら、ついその機会も無いまゝに過ぎてしまいました。

また、そのような常識外れの人間を暖かく受け容れ、ずっとおつき合い下さった萩原先生御夫妻を、現在では珍しい、おゝらかな方々と感心して居りましたが、今回この作品を読ませて頂いて、成程、御先祖の真塩紋弥の、来る者は拒まず、の寛容の精神が受け継がれているのかと、ひとり納得した次第です。

その後、私ごとですが、脚や腰を痛め、治療に伺うようになってからも、御自分たちのことは二の次で、他人の為に尽くすという御夫妻のお人柄に、心から感服しながらも、この騒々し

い世の中で、このようにおつとりともの静かに生きていらつしやる方々もおありなのかと、ほつと心の洗われる思いをしております。

それも明治維新という大動乱の波に翻弄されながらも、あくまで自分の信念に忠実に生き抜いた、真塩紋弥の遺伝子の成せるわざなのでしょうか。

真塩紋弥のように、埋もれた——と言うか、一部でしか知られていない篤志家は、他にももつとあるでしょうし、それに関連したエピソードなども、いろいろ面白いものがあると思います。例えば、勘定奉行直属の、八州廻り特務同心、山村主膳が、利根川の支流で水運を司る船長ふなおさで元侠客の、遠山常左衛門、通称「赤腹掛どんぶりの安」が遠山姓であることに目をつけ、その頃も庶民に人気のあつた「遠山の金さん」こと遠山金四郎景元の縁者を詐称させて密偵に使つたこと、そして、武州世直し一揆の報を早々にもたらした手柄で、勘定奉行に目通りを許された「赤腹掛の安」が、辰の口の評定所で奉行相手に仁義を切つた話など、その場面を想像するだけで、思わずふき出してしまいました。

また、秣場騒動で紋弥が入獄後の家族の苦悩や、家を出た息子達との葛藤、二人の息子達が、その後どのように生きたか、なども十分に一編の小説に成り得る素材だと思えます。

“天才は故郷に容れられず”の譬え通り、農民運動の先駆者であつた真塩紋弥も、地元の新聞で、農民を食い物にする煽動家ときめつけられました。

しかし、それ以上に紋弥を傷つけたのは、一番自分を理解していた次男の順之助が、警察による自宅襲撃の際に、激しく抵抗して撲殺されたこと、双子を忌む迷信に捉われた母の嫌悪を避ける為に、評判の美人に育つた双子の娘達を、横浜の旧知の許に預けざるを得なくなつたことでしょう。

傷心の紋弥は、心の依り所を求めて、地元の妻沼欽喜院聖天堂の院主、鈴木大全に面談を乞ひ、獄中の生活で強い男になるには、優しさに徹することが大切と悟つた、と語っています。

そして幕府崩壊後、十手を返上して船頭に戻つた赤腹掛の安と旧交をあたゝめたとき、自分を喜ばせる為と彼の心情を思いやつて、追従めいた拙い冗談にも興じるなど、一応は穏やかな日々を過ごしたようです。

その後、鈴木大全の助言を受け、長女厚に門弟中島竹次郎を養子に迎えました。家運は次第に傾いたとはいえ、妻サダに看とられての七十四才の最後は、波瀾に満ちた生涯とは対照的に、静かなものだったと伝えられています。

食糧の自給率や遺伝子組換え食品、農家の後継者不在、休耕田や里山の荒廃等が問題になっている今、そして一方では大企業による農業参入や、一部の若者達の農業志向などが話題になつ

ている現在を、真塩紋弥ならどう感じることでしょう。

紋弥が提唱した重農主義にたち戻ることは、今更あり得ないとしても、農業を重視するという信念は、先見の明と言えるでしょう。

たゞ、いつの世も、早すぎる先駆者は容れられないのが常のようで、紋弥も時代の犠牲者と言えらると思います。

利害を度外視して、自分の信念に忠実に生きた真塩紋弥の生涯を、自己中心の人間が多い今こそ、広く知られてほしいと願ってやみません。

書評解説 「関係性が織りなす物語」

村木哲（評論家）

著者、たなか踏基の著わす歴史（時代）小説には、大きな特徴がある。

それは、為政者や公権力の中核にいる人物に焦点をあてていくのではなく、地方の足軽、陶工ややくざもの、そして、山師や鉾山師といった人物たちが物語を動かしていくことにある。しかもそれぞれが、薬種栽培、陶芸、横浜元町の新興開拓、鉄山採掘といった必ずしも、歴史

の表舞台として脚光を浴びるようなところではない場所から、その独自の物語世界を放っているといっている。そもそも、歴史というものは、教科書的に記述されたことだけが、正史というわけではない。細部に横たわって幾つもの断片があり、それらが層となつて重ねあわされ、歴史という描像は表れるのであつて、為政者の権力の変遷にまつわることだけが、歴史というものではないからだ。

本書もまた、幕末・明治初期という激動する時代空間が背景にあるにもかかわらず、中心となる人物像は、八州廻り、利根川の船長、漢学者、やがてその妻となる薬草採取を生業とする女というように、尊王だ、攘夷だといった喧騒とは無縁の場所から物語は、はじまっていく。

文久三（一八六三）年秋、本庄宿（現在の埼玉県本庄市）を根拠地に積み荷の運搬をする平田舟の親方で元侠客・遠山常左衛門のもとへ、八州廻り特務の山村主膳が訪ねてきて、密偵として働かないかと頼まれる。「一度は高崎で任侠道に嵌つた常左衛門が挫折したとはいえ、今度は何と八州廻りの密偵：／年甲斐も無く身裡に鼓動と横溢な気が漲る思いがし」て、引き受けることにする。

上州堤ヶ岡村出身の青年・真塩紋弥は、郷里を後にして江戸に出たのが十三歳の時であつた。漢学の私塾で勉学に励むためであつたが、六年間学んできたところで師匠が亡くなり、将来に對しての不安を抱えていた。師の亡き後の塾に薬草採取の目的で二人のスウェーデン人が訪ね

てくる。その応対に苦慮していた紋弥が、以前、葉種のことと世話になった多摩郡金井村（現・町田市）の萩原六右エ門に江戸へ来てもらおうと考え、使いを出したところ、やってきたのが、六右エ門の次女萩原定だった。

そして、定と紋弥が、二人のスウェーデン人を小石川葉草園に案内した帰り、四人は、「浪人風侍とヤクザ男」に絡まれてしまう。そこに、江戸に出てきていた主膳と常左衛門が遭遇し、結果的に紋弥とサダは救われるという、物語の中心人物の四人が初めて出会う場面がある。

ここでは、サダの際立った存在性が描出されることに、わたしは、惹き込まれた。

主膳が浪人風侍たちに「どこのご身内か？」と問い掛けるのを無視したことに、憤り、サダは次のように、侍と応答していく。

『「ちよつとお待ち下さい。お侍さま」／瓜実顔の女が櫂を外しながら声を発した。／『何だ百姓女の出る幕じゃねえ。引つ込みな！』／『その百姓女がお尋ね申し上げます。皆様方は何処のお身内でございますか？ 先程の主殿の問いにお応え下さいまし。ご浪人さま、この武家屋敷界隈を一体何と心得ておられますか？』』

「危機にあ」りながら、「野良着女の度胸に、主膳、常左衛門共に舌を巻いた」と、同時に、紋弥もまた、「修羅場でも平然と落ち着き、啖呵めいた台詞を吐くおサダ」に好感を持ち、やがてふたりは夫婦となり、塾を引き継いでいくことになるのだ。

ここから、紋弥とサダ、主膳と常左衛門というふたつの層が織りなして、物語は進んでいくという、重要な物語の核ともいえる場所である。

主膳の獄中での自死という悲劇を描いた後、物語は終景へ近づきながら、紋弥が指導的役割を果たすことになる群馬秣場騒動へと活写されていく。

秣とは牛や馬の飼料になる草のことであり、秣場は、農民たちが共同で管理する場所であった。それが、官有地となったことから入会権の侵害として村民たちが抵抗していったのが、群馬秣場騒動の発端であった。

明治新政権による改革というものは、村落共同体的な関係を、中央集権のなかに組み入れて統治していくものであった。わたしたちは、明治期以降の歴史教科書のカテゴリーの中で、江戸期の身分差別の構造が強調され、明治近代は開かれたものとして教え込まれてきたといっている。しかし、たなか踏基による物語のモチーフは、身分制を超えた関係性の基調のようなものが、江戸期の方に緩やかに横断していたと見做しているように思える。

紋弥、サダ、主膳、常左衛門という物語の中心の四人が織りなす関係性こそが、時間性や既知の歴史性を超えて、わたしたちにとっては、普遍的なことなのだと、伝えているように、わたしには思われる。